

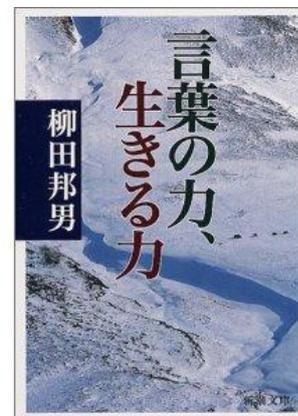
「物語を生きる人間」とケアの意味
(平成 24 年 10 月 3 日 柳田邦男先生)

講演の中で柳田先生は、「人はなぜ、自分の思いを表現しようとするのか。それは、大きな喪失や何か大きな壁にぶつかった時にどうやって『生き直すか』と関わる。」と話されました。

人が「書く」理由は、「人は『うつ』の時でも、なんとか生きようとしている。生きる道が見えないだけで、探している。人は内面がカオス状態では明日を生きられないから、書くことにより、生きることの一筋の脈絡を見出そうとするのである。玉だったものから糸を紡ぎだすことで、脈絡ができ次につながっていく、そのことと似ている。語ったり書くことで、主語・述語など、文法的に脈絡がついてくる。そうすることで、他人との関係性や自分が置かれている状況が、自分でも見られるようになる。自分の状態を見ることが全ての出発点である。それから、『さあ、どうしよう』ということにつながっていく」からだそうです。

また、「限りある命はどこから来て、どこに行くのか、生きた意味を確かめたくなるからである。自分なりに人生を振り返り、納得のいく死を迎えたいということである。つまり、『自分の死を作る』時代」だからともおっしゃいました。

これまで、「人が文章を書くこと」の理由や意味を深く考えたことがある人は必ずしも多くはないのではないのでしょうか。柳田先生のように、文章を書くことを職業とされている方と私たちでは、「書くこと」に対する姿勢や感性は異なるのですが、「書く」という行為が、限られた命を生きる意味を探ることにつながることで、そして、それを求める人が少なくないことを知り、私も何かを書いてみたいと思いました。



言葉の持つ力について考えさせられる
柳田先生の著書です。
柳田邦男著「言葉の力、生きる力」
新潮文庫刊

日本社会の「不自由さ」を超えて 支えが安心をもたらす社会へ
(平成 24 年 10 月 31 日 上田紀行先生)

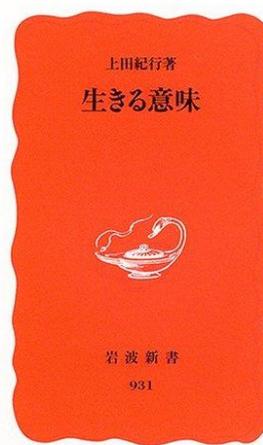
上田先生は講演の初めの方で、「未曾有の豊かさの中で生きている私たちが、なぜ不自由を感じるのか、どうすれば、抜け出せるのかを話します。」と言われ、私自身が常日頃感じていることだったので、一気にお話に取り込まれました。

先生は、「ある政治家の『議員は使い捨て』と言う発言に驚き、さらにその発言について、学生に聞いたところ、半数の学生が賛成したことにさらに驚いた。」と話されました。また、「このような世の中にしたことは、大人の責任である。」と言い、そういった時代の雰囲気なぜ生まれたか、その理由に関するキーワードとして「透明な存在」という言葉を挙げられました。先生は、「この言葉が、現代日本を象徴する言葉だ。」とおっしゃいました。

「透明な存在」とは、他者からの視線を過剰に意識するあまり、「本音を人前で言うてはいけない」「空気を読まなければいけない」「本当のことを言わない」ことで、いじめられないよう「色もおいもなし」存在になった人間のことを言うそうです。

そして、多くの人たちが「透明な人間」になってしまくと、その人たちは、「自分は交換可能な存在なのだ」という病にかかり、自らの尊厳を傷つけられることになる、といます。「交換可能」という言葉が「かけがえがない」という言葉の反対語であることを考えれば、「透明な存在」の人間が「なぜ自分がここにいないのか」が分からなくなり、充実感や幸福感を持てなくなるのは無理もないとのこと。

私自身、「現代の生き辛さがどこから来るのか」ということを問題意識として持っていましたが、他者の視線への過剰な意識が原因の一つだとの指摘に、目からうろこが落ちた思いでした。もちろん、それが全てではないとは思いますが、その分かりやすさ、納得感に、講演の帰りに、書店で先生の著書「生きる意味」を買ってしまいました。読んでみて、改めて先生の考え方を深く理解できたことから、二度おいしい気分になった良い一日になりました。



平成 18 年度大学入試出題数第一位だそうです。

「生きる意味」岩波新書

生きることの意味を探す
(平成 24 年 11 月 7 日 高木慶子先生)

講演の初めの方で、高木先生が明るい穏やかな声で「生きる意味を探すのは、その人がつらい時。この講演に来られたのは、今、つらいからでしょう。」「この講演で心がすっきりした、軽くなったなら、私はうれしい。今日は自分自身が癒される場としてほしい。」と話された時、会場が一瞬で和やかで安らいだ空気に包まれたのが、とても印象的でした。

また、先生は東日本大震災の被災地を訪問された時の経験を話されました。津波に襲われた町を訪問して瓦礫を片付けているボランティアの様子を見ておられた時、被害に遭った遺体発見の場に居合わせたそうです。その時、先生は大きな声で「みなさん、念じましょう。祈りましょう。そして、お送りしましょう。」と呼びかけられたそうです。そうすると、その場にいたみんなが帽子、手袋を取って、見送ったそうです。私はその場の様子を想像するだけで心が震える思いがしました。「誰かのために役立ちたい」という先生の優しくも強い気持ちがとてもよく伝わってきました。

そのほかにも、先生は被災地を訪れて出会われた家族のエピソードをいくつも話されました。それは、先生が「人がなぜ生きていて、なぜ死ぬのか。理屈では納得いく答えは出ません。」「生きる意味と希望を探すには、理屈で考えるのではなく、具体的な事例で考えたいのです。」との思いからで、講演を聞いている私たち一人ひとりがそれらのエピソードから感じ取って考えることを促し、励ます先生の優しさは、受講生の皆さんにも伝わったのではないのでしょうか。

今回は事情により、当初予定の青木新門先生が来ることができず、急遽、高木先生にご講演いただくことになったのですが、急なお願いにもかかわらず講演を快諾いただきました。本当にありがとうございました。



大震災の被災現場で悲しみと寄り添う先生の著書です。
「悲しんでいい 大災害とグリーフケア」NHK 出版新書